

## 第 13 回 箱 根 大 会 雑 感

本大会を終えての感想は、豪華な中にもピリッとしたものがあっただけということである。会場が天下の名所の箱根であるということ、豪華なホテルでの宿泊、劇「ホテル日記」の上演、懇親会での「箱根馬子唄、箱根雲助大鼓」のアトラクションは華やかで、昨年鳥取での「ふるさと大会」とは対照的であった。

昨年打合せに訪れたとき、信濃助役さんに「この会は学究的な面をもち、会員は自費で出席するのだからなるべく地味に」とお願いしておいたのだが、やはり国際観光地箱根という土地柄と、ホテル愛護会や川を守る会の人たちの長いあいだの川とのたたかひが実と結んだので、それが大きく反映したのであろう。

町役場企画課の加藤課長をはじめ課員の方々は細かいところにもよく気がつき、種々手助けをしていただいていたありがたかった。しかし、筆者も相当気の早い方だが次々と伝令が舞いこみ、常にせき立てられていたというのが実感であった。

座談会と研究発表を通じて、今大会ほどカワニナの飼育法をめぐる話題が集中したことは、かつてなかったように思う。人工飼育はもとより、放流川におけるカワニナの増殖方法および放入と補給等は、切実な問題で今後の研究が待たれるしだいである。

今回はシンポジウムで、広い視野に立ってホテルと人間社会とのかかわり、ホテルの住みつく環境について、各講師から有益な話題を提供してもらった。

ホテルは人間生活と深い関係をもち、我々がその生息を助長させる反面、生息域分断、もしくは絶滅に迫りやうな状態である。一度破壊された自然（河川）を復元させるのに多くの困難と長年にわたる努力がいるが、山地（人里附近）における陸性のホテルの生息、また35年余りも人畜から閉ざされている自然の中でのゲンジボタルが、食物連鎖によって一定のバランスを保ちつつ生息している有様、河岸環境によって成虫の分布が異なつたようすや、河底の環境がホテル幼虫と他の昆虫生息との密接な関係の解明がなされたが、放流はあくまでも一手段であつて、彼等の住みつく環境づくりが重要であるだけに、今後これらの分野について一つ一つ掘り下げていく必要を痛感した。

（村上、1980.10.10）